

尾崎士郎の落第

—— 中学時代の人間形成 ——

都 築 久 義

はじめに

尾崎士郎は明治四十三年四月、愛知県立第二中学校に入学した。同校の歴史と伝統は現在、愛知県立岡崎高等学校に継承され、近年は東大進学者が公立では全国でトップクラスの高校として話題を呼んでいる。同校は創立90周年を迎えた昭和六十一年に、記念事業として『愛知二中／岡崎中学 岡崎高校九十年史』（以下『九十年史』）を刊行し、卒業生である尾崎士郎の代表作『人生劇場』の文学碑を校内の一隅に建立した。今年（平成二十一年）六月に日本近代文学会東海支部編『東海』を読む』（風媒社刊）に尾崎士郎の生家の没落について書いたのが本稿では中学時代について触れてみたい。『九十年史』によれば、愛知県立第二中学校は明治二十九年四月、「愛知県第二尋常中学校」として開校し、三十二年に「愛知県第二中学校」と改称したが、三十四年には「県立」を付して「愛知県

立第二中学校」とした。さらに大正十一年には、県下各地で中学校開設の気運が生じたのを受けて、県立中学校は原則として所在地の名を冠した名称とするとの方針を打ち出し、「県立」を削除し「愛知県岡崎中学校」とした。そして戦後の学制改革で昭和二十三年に新制高校が発足し、現在の「愛知県立岡崎高等学校」となった。

愛知県第二尋常中学校開校以前は、愛知県の県立中学校は明治十年開校の「愛知県中学校」（後に第一中学校となる）のみであった。しかし、第二中学校が開設されて四年後の三十三年には第三中学校が津島に、第四中学校が豊橋に開校され、県下全域に中学校が設置された。『九十年史』には明治三十九年の県立中学校の生徒の（一中から四中）の出身地の人数が載っているが、それを見ると二中の生徒は西三河地方出身者が圧倒的に多いものの、尾張地方や東三河地方からも少なからぬ生徒が来ているのは、一中、二中の歴史と伝統のゆえであろうか。

尾崎士郎の入学前後の愛知二中の全校の定員は六〇〇名で、明治四十二年の一年時の志願者数一六六名、入学者数一二七名、全校の生徒数五四五名。四十三年は志願者数一六六名、入学者数一二八名、全校の生徒数六〇四名。四十四年は志願者数二〇九名、入学者数一六四名、全校の生徒数五二九名（『九十年史』）であった。教職員数は年度によって多少の変動はあったようだが、『九十年史』には明治四十五年度の教職員名簿に、校長を除く教諭は十九名、教諭心得・助教諭心得が七名の他、数名の書記などの名前が載っている。校舎は明治三十年に岡崎村戸崎に開校時の校舎から移転していた。その後、岡崎中学校は現在地の岡崎市明大寺町に移転（大正十四年）した。

尾崎士郎は「人生劇場・青春篇」の中で、青成瓢吉が通った中学校の風景を次のように描いている。

校庭の白砂が日光をてりかへしてゐる。高原の上にそびえてゐる中学の校舎のうしろには赤土の肌をムキだしにした丘がゆるやかな勾配を描き、その下は波をうった、やうな桑畑だ。街道筋になつてゐる正面の前の道はかさかさに乾いて、岡崎の町へゆく鉄道馬車が鈴をならしてとほるごとに白い砂ほこりが砲煙のやうに舞ひあがる。しかし、正面の眺望は青田と桑畑のほかには眼をさへぎるものはない。

『人生劇場・青春篇』 文芸春秋新社 昭27・10

尾崎士郎は明治四十三年四月に愛知二中に入学したと冒頭に書いたが、実は一年生の時に落第している。そのため翌四十四年四月に入学した生徒と一緒に進級し、大正五年三月に卒業した。

彼が一年生を落第したことは、彼の人生に大きな影響を与えた。その最大の影響は落第によって、彼は雄弁家を志願し、政治や新思想にめざめたことである。もう一つは、落第によって大須賀健治と同級生になったことであり、大須賀と親交し、社会主義への関心を深めていった。

落第とは無関係であるが、たまたま在学中に徳川家康の没後三百年祭が岡崎で行われ、愛知二中も学友会誌を記念号とし、尾崎士郎も「徳川家康公論」を寄稿した。この論文には彼の人生観と文学観が表れている。

本稿では落第と「徳川家康公論」に焦点をあて尾崎士郎の中学時代の人間形成について論じたいと思う。

(一)

尾崎士郎は「雄弁家志願」(『雄弁』昭13・10)の中で中学時代の落第について次のように書いている。

私は少年時代から非常なドモリで、友達同志と話をしても満足に物が言へないやうなことが多かった。人と会ふと直ぐ真

赤になつてへどもどする癖が何時の間にか自分を孤独で引込思案な少年にしてしまつてゐたのである。(略)今から考へると妙な話であるが、中学に入つた年に私は親戚の家に寄食して、そこから学校に通つてゐた。或朝、いつになく早く眼を醒すと、襖越しに隣室で話しあつてゐる人の声が聞える。「申し分のない児だけど、あんなにドモリでは、どうにもならんぞよ」と伯母の声であつた。(略)嘘のやうな話であるが、教室に入つても教師から質問を受けるのが苦しく、誰に会つても肚の底から軽蔑されてゐるやうな気がして、たつた一人でボンヤリ暮してゐるやうな日が多かつた。勿論ドモリだけが原因ではなかつたが、最初の一年は学業不成績で到頭落第の悲運にめぐり合ひ、父親からは小僧に行けと言はれ、散々叱りつけられたのを母親の侘びで兎も角も、もう一度学校に行くことを許されるやうになつたが、しかし中学時代の落第生といふものは実にじめじめなので、新入生達が着物を着て登校して来るのに交つて、自分だけは一年間着古した洋服を来てゐる姿を見ると悲しさで胸がこみあげてきたのを覚えてゐる。

『隨筆集 関ヶ原』 高山書院 昭15・12 所収)

尾崎士郎が愛知県立第二中学校へ入学した明治四十三年四月の入学者は一七八名。『九十年史』に載っている「第二中学校の学業成績表」によれば、一年生は及第が一一一人、落第が一三人となつて

尾崎士郎の落第 (都築久義)

いる。数名の退学と約一割の落第というのは当時としては必ずしも多くはあるまい。逆にいえば、尾崎士郎にしてみれば、わずか一割の落第生の中に自分が入つてしまったことが口惜しかつたはずだ。

口惜しいと思ふとかうしてはいられぬといふ氣持になつてくる。陽氣の発するところ金石もまた透るといふではないか。よし、おれだつてやつてみせるぞと私は心に深く誓つたのである。その頃、英雄偉人の伝記を貪るやうに読んでゐたが、少年時代にドモリだつた人物はゐないかと眼を皿のやうにして探してもそんなことは何処にも書いてなかつた。ところが何かの機みでデモステネスの伝記を読んだとき私は初めてあたらしい光明に触れたやうに胸を躍らせた。いよいよ弁舌を練らうと決心したのである。決心した以上はやらねばならぬ。私は毎朝早く起きて、みんなが寝しづまつてゐるあひだに矢作古川の堤防に出て演説の練習をやつたものである。十四五歳の頃から演説といつても読んだ文章を片つぱしから暗記して、そいつを一氣にまくしたてるだけのことだ。

デモステネスといへば古代ギリシヤの雄弁家として有名な政治家であるが、彼の伝記を読んで発奮したというのが、いかにも明治の氣骨ある少年らしい。こうして弁舌に活路を見つけ、演説の練習に励み、やがて校内の弁論大会で活躍し、校内きつての雄弁家として

知られていった。尾崎士郎が演説好きだったことは担任の目にも映っていて、学籍簿の「生活習慣・嗜好」の項目には、一年は文学のみだが、二年になると文学、演説と記載され、三年は左に同じ、四年と五年は演説だけとなっている(拙著『東海文学紀行』中部日本教育文化会 昭54・11)。このように学籍簿をみると彼の嗜好は四年生、五年生になってはっきり「演説」に向かっていったことが記載されている。

ただし、彼がどのような雄弁活動をしていたかの記録は少なく、『九十年史』には、明治四十五年の学芸部記録として、「当時二年生の士郎が〈春季大口演会〉で〈剛健不屈の精神〉と題して弁舌を行ったことが、『学友』(大正元年)に載っていると記されている程度だ。他には「あるときの弁論大会場で、士郎の弁論の途中でかの〈マンモス〉こと北岡教諭が突然烈火のごとく怒りだし、士郎を壇上から引きずりおろしたということもあつたらしい」の記述がある。

拙著『実説 人生劇場』(白馬出版昭47・5)を出版した折に、中学の同級生の杉山新樹氏(元愛知教育大学教授)が、「尾崎の雄弁術よりも、尾崎の演説の内容がなにか社会問題であったことの方が、びっくりした」と語られたが、雄弁を学ぶなかで、尾崎士郎がしだいに社会問題に関心を持つようになったことはまちがひなかるう。

折から大正デモクラシー全盛期で新思想を掲げる雑誌が輩出して

いたが、なかでも中央のみならず地方の青年にも人気があったのが『第三帝国』だった。松尾尊允の『大正デモクラシーの研究』(青木書店 一九六六・六)によれば、『第三帝国』は『万朝報』の人気者であった茅原華山を「主盟」にかついで、石田友治が大正二年十月に創刊した雑誌である。基本的には普通選挙を主張していたが、「新思想を求める青年インテリは中央にかぎらず地方の中小都市にも農村にもいて、大変な人気を呼んでいた」という。

尾崎士郎もまさに「新思想」を求める地方のインテリ青年として『第三帝国』を購読し投稿していたのである。尾崎士郎の同誌への投稿で掲載されたのは三回。最初は大正4年4月5日発行の36号。投稿欄ではなく一般記事として「中学と師範の改革」と題されている。二回目は大正4年9月1日発行の50号。「帝国主義者に与ふ」、三回目は大正4年11月11日発行の27号。「孝の新意義」。後の二篇は「戦鬪曲欄」という投書欄に載ったものだ。

「中学と師範の改革」は、正確に言えば投書というより、茅原華山に出した手紙である。掲載文の前書きで華山は「少年にして高科に登る一の不幸なり」ということと、「没分曉の教師に危険思想視されては気の毒」という理由で「十八に為る中学生に告げます。私は貴君の名を省きました」と断ったうえで原文を載せている。標題も華山がつけたと思われる。したがって筆者の名前は載っていないが、これが尾崎士郎の書いたものであることは、彼の回想記からあきらかだ。尾崎はまず地方の中学生と中学校教育の実情を訴えて

いる。

地方の中学生は一般に正直で温順であります。彼等の頭脳は頗る単純であります。彼等は試験を以て彼等の生活の目標としてゐます。彼等は教師に対して、出来る限りの御世辞を並べて其点数の少しでも多からん事を望んでゐます。(略)然し思ふに是等は決して学生の罪ではありません・專制的軍隊的の学校が試験制度と言ふ繩を以て若い青年の心身を一步たりとも外に出すまいと努めているからであります。(略)又学生は社会通常の事に対しても其意見を述べる事が出来ません。況んや政治問題に於てをやです。殊に輕薄にも教師は少しく異つた議論をする者があると直ぐに危険思想だと申します。

こうした地方の中学生と中学校の教育体制を憂い、「現代の最大急務は実に中学校の改革ではありませんか。あゝ、吾に言論の自由を与へよ。青年が時局を論ずるのがなにが悪い」と訴えている。『九十年史』によれば、日露戦争後の社会主義運動が高揚し始めた状況の中で、中学校に対して「生徒の思想統制や訓育を徹底させるためいくつかの訓令が発せられた」という。

普通選挙を主張する『第三帝国』の熱心な読者であった尾崎士郎は、雑誌『世界之日本』が創刊五周年(大正四年七月号)を記念して募集した「如何にして選挙権を拡張すべき乎」にも論文を送って

尾崎士郎の落第(都築久義)

いる。応募総数三二八篇の中から優秀作三篇が、六月号に掲載され、此の三篇の中に尾崎士郎の「まず教へよ」が入った。続いて七月号で審査結果が発表され、尾崎は三位に入賞した。

「まず教へよ」は「選挙権拡張を為さんと欲せば先ず其教育制度を改革せよ」と主張した論文であり、前述の「中学と師範の改革」の延長線にあることは容易に想像がつこう。この二論文は尾崎が当時の中学校の教育にいかにも不満を抱いていたかを彷彿させる。普通選挙に関連する論文といえば、大正四年九月号『雄弁』の「尾崎行雄氏の為に弁ず——八月号を読みて岩崎英祐君に教ふ」も書いている。尾崎行雄がまず帝国大学、慶應義塾、早稲田大学の三大学に選挙権を与えよと唱えたのに対して、明治大学の岩崎英祐が明治大学にも与へよと訴えたことを、「足下の尾崎氏に与へたる一書は余りに感情に過ぐる事無き乎」とたしなめた一文である。

中学時代の普通選挙運動への関心は、上京して早稲田大学に入學すると実戦活動に発展し、普通選挙運動史に尾崎士郎が名を残したことは別稿で述べる。

『世界之日本』の懸賞論文に入賞したことは、尾崎士郎の進路にも影響を与えた。

「世界之日本」といふ雑誌が政治論文の懸賞募集したときに私は応募して二等(注三等)に当選した。選者は永井柳太郎であった。早速永井氏にあてて手紙を出すとすぐに返事が来た。手

紙は五六回往復したやうに覚えてゐる。私が「文学士」にならうとする少年の夢を捨てて早稲田大学の政治科に入ったのもそれが動機となつたらしい

〔文学以前の私〕初出不明 随筆集 『裸』金星堂 昭14・7 所収)

永井柳太郎は尾崎士郎も深くかわつた「学校騒動(大正6年9月)で大学を追われ、郷里の金沢から立候補して代議士になったが、学生時代は雄弁会を結成して、早稲田大学雄弁会の伝統を築いた。尾崎士郎も大学に入学すると早稲田大学雄弁会で活躍したことはいうまでもない。

(二)

尾崎士郎は『私の履歴書』(日本経済新聞社 昭38・10)の中で、「岡崎中学からの親友だった大須賀健治」についてふれ、

いずれにしても大須賀との人間関係が、私の思想傾向を次第に社会主義的な方向にみちびいたことだけは確かである。

と述べている。大須賀健治の叔母が山川均の前妻で、実家には「共産党宣言」、クロポトキンの「パンの略取」の翻訳や平民新聞

の綴込、「へちまの花」(後に「新社会」と改題)合本など)があり、「むさぼるように読んだ」ことが「思想傾向を次第に社会主義的傾向にみちびいた」のだった。

大須賀健治は、尾崎と同じ明治三十一年生まれだが、尾崎は二月の早生まれで、大須賀は八月生まれだったため、入学は尾崎より一年遅い明治四十四年だった。したがって本来は尾崎の方が一年上級生であったが、尾崎が一年生を落第したため、大須賀健治と同学年になったのである。といつても、尾崎と大須賀が同じクラスになったのは五年生の時のようだ。福岡寿一編 大須賀健治著『三河平野』(拙著『東海文学紀行』中部日本教育文化会 昭54・11 所収)で次のように書いている。

尾関——彼れは五年級になつてクラスが同じになると共に朝平とよき話相手となり、一方は強い性格の持主、一方は弱い性格の持主ではあつたが、強き者も真の心の底には弱きものを蔵して居り、弱き者も亦何処かに強い力の閃きのあることが二人を結びつけた。しかし、朝平は是れ以上彼れと共に進み得ないことを悲しんだが、どうすることもできなかつた。

大須賀健治の家は岡崎に隣接する藤川村で織布工場を営む当地の素封家であつたが、社会主義者として著名な山川均の亡妻里子の実家でもあつた。大須賀里子の経歴は詳かでないが、かつて拙著『若

き日の尾崎士郎』(笠間書院 昭55・1)を執筆した際の調査では、彼女は明治十四年生まれで、二十一歳の頃にアメリカに渡り、開校(明33・12)したばかりの東京女医学校に入学したものの、幸徳秋水、堺利彦、山川均等の社会主義者が開いていた金曜講演会(明治40・9開始)に出席するようになって彼らと交流を始め、『東京社会新聞』(明41・5・5)によれば「山川均君、今回大須賀さと子女史と結婚した」。山川均二十八歳、里子二十七歳であった。しかし、結婚生活もつかのま、里子は大正二年、三十一歳の生涯を閉じた。大須賀健治は里子のことを次のように書いている。

大正二年の今日、山川均氏の看護を受けつつ岡山の病院に於て伯母は長逝した。十歳の我れに社会主義を教へし伯母であった。当時少年の胸に印刻されたる社会主義なる言葉は十八歳の青年の頃、段山(注 尾崎士郎)と相交るに及んで内容を持つに至った。十九歳の冬、山川氏東上の途次、茅屋に立ち寄り、親しく会談するに於て癒々色彩濃やかならしめた。爾後、社会主義思想は我れを苦しめ我れを救ふ。今日に際し、謹んで伯母の冥福を祈る。

(前出『三河平野』)

このような田舎ではめずらしく特殊な環境で育った大須賀賢治は早くから社会主義を知り、山川均に会って、いっそう関心を深め

た。愛知二中で尾崎士郎と同じクラスになり、親しい間柄になって、二人は将来の進路も共に歩むことを誓ったようだ。『私の履歴書』(前出)でこう続けている。

私が上京したとき、大須賀も私のあとから、やってきて、共に相結んで新しい時代に進路を開こうということを書き合った。(彼は長男で実家の木綿問屋をつがねばならぬ義務があったが、もし父が反対したら家郷を捨てて上京し、共に苦学しようという方針まで立てた。)そういう事情だったので、私は上京して早稲田入学が実現するとすぐ、大須賀といっしょに山川氏を訪ねる手筈にしていたのである。私の方の計画は順序どおりにいったが、大須賀はついに実家から脱出する機会をつかむことが出来なかった。

〈順序どおりにいった〉尾崎士郎が売文社に山川均を初めて訪ねたのは、売文社発行の『新社会』(大5・11)に、「シロウ君 今年□□□(注早稲田)へ入ったばかりの一少年であります……」という記事から推測して大正5年9月頃かと思われる。

いずれにしても尾崎士郎は当時の社会主義者たちの梁山泊だった売文社に入りし、彼等と交友を深め、行動を共にしたために、手許の近代日本史料研究会編『特別要視察人状勢一斑(第八)』(明治文献資料刊行会 刊行年月不詳)によれば、大正六年十二月二十四

日付で、「特別要視察人」に指定されている。ちなみに在京の特別要視察人は大杉栄、堺利彦、山川均といった、いわゆる大物が並んでおり、弱冠十九歳の早稲田の学生の分際でここに名を並べているのが目を引く。

尾崎の売文社時代は拙著『若き日の尾崎士郎』(前出)で詳しく書いているので、本稿ではふれないが、尾崎の後を追って上京するはずだった大須賀の方は、手はず通りに事が運ばなかったようだ。尾崎士郎が早稲田大学に入学し、売文社を訪ねた様子を聞くに及び、矢も楯もたまらずついに出走した。『特別要視察人状勢一班(八)』(前出)には次のような大須賀健治についての記述がある。

「本人ハ同七年一月十三日両親の意ニ反シテ再ビ上京ノ途ニ就キ同二月十五日ヨリ堺利彦等ノ経営スル売文社ノ受付関係トナリ(略)右本人ノ拘禁セラルルニ至リタル以来本人祖父及父母等ハ大ニ之ヲ憂慮シ祖父上京ノ上同三月十六日日本人同伴帰県セリ」

大須賀健治は祖父に連れられて帰郷した後のことは『三河平野』に書いてないが、尾崎士郎が「人生劇場」で脚光をあびていた昭和十二年五月二十一日、自らの手で三十九歳の生涯を閉じた。かつて大須賀家を訪ねた時、尾崎士郎と並んで撮影した中学時代の写真が数枚あったのを見せていただいた。健治にとってこの写真にどんな

思いがこめられていたのだろう。涙を禁じえなかったことを覚えている。

中学時代の級友で影響を受けたのは大須賀健治であるが、恩師として回想記に頻繁に登場するのは繁野天来先生である。尾崎士郎が学外の雑誌に社会問題を投稿したことで物議をかもし、教員室でも相当厳しい意見が出たのを、終始一貫して尾崎士郎のために弁護してくれたのは、英語の教師であった繁野天来先生であった。

繁野先生は私が一年生のときの主任教師であった。先生の在職が、眼に見えない文壇というものを一中学生である少年の私に認識させる動機をつくったことは特につけ加えておく必要がある。(略)一種の変則な文学少年であった私を繁野先生は六年間(当時の中学は五年制であったが私は一年を二回やったので六年かかっている。)を通じて真剣に面倒を見てくれた。(略)教室の中においても興が乗じてくると誰に聞かせるというわけでもなく、バイロンを論じたり、シルレルや、ワーズウオースについて語る一見して風采のあがらぬ、素朴な感じの好々爺の姿は、今でも私の頭にハッキリとうかんでくる。淡々たる講義ぶりに少しの気どりもなかった。私たちが先生の自宅に遊びにゆくと、東京にいたころの文壇の思い出ばなしをしてくれたが、あたらしい時代の風潮には同化しきれないものらしく、ときどき興奮のため先生の顔には、若々しい闘志のみなぎってくるこ

ともあった

『小説四十六年』講談社 昭39・5

『九十年史』によれば、繁野政留（天来）は明治七年徳島で生まれ、明治二十七年に上京して、東京専門学校（早稲田大学の前身）の文学科に入学するも三十年に退学。三十八年に検定試験を受けて中学教員の免許を取得し、水戸中学を経て四十一年に、愛知二中に赴任した。同校を離任して台北中学へ転任したのは、尾崎士郎が卒業した大正五年である。「人生劇場」では飄々とした「黒馬先生」の中に、面影を投影させているが、繁野天来との出会いも、中学時代の尾崎士郎の人間形成に少なからぬ影響を与えたことはまちがいないだろう。

(三)

『中日新聞に見る 昭和の追憶』（中日新聞本社 昭55・12）には、昭和三十七年の項に「家康ブーム」の見出しをつけ、「読書界の話題」として次の記事を再録している。

直接経営学とは関係なく経営書として読まれたのが「徳川家康」がはじめて。この本が三百五十万部も売れたということは異色ベストセラーとしてことし注目してよいことだ。

尾崎士郎の落第（都築久義）

（中日新聞 昭37・12・23）

山岡荘八の「徳川家康」が中日新聞など地方紙三社連合系の新聞に連載が始まったのは昭和二十五年三月（昭和四十二年四月終了）で、昭和二十八年一月、講談社から単行本の刊行が始まり、昭和四十三年三月、第二十六巻で終了した。

昭和三十七年といえば、三十九年の東京オリンピック開催を前にして、日本が高度経済成長を目指していた時である。企業は活気づき、企業の経営者たちは指針を求めていた。そこに登場したのが「徳川家康」である。周知のように家康は小国の三河の国から身を起こし、戦国乱世を生きのび、三百年ちかい徳川体制の基礎を築いた。その生きざまと政治的手腕は、競争社会でしのぎを削る弱小企業の経営・管理に通じるものがあるとして、経営者や管理職のサラリーマンに読まれ、「異色のベストセラー」となったのである。

この「徳川家康ブーム」に水をさしたのが尾崎士郎である。『文芸春秋』（昭38・7）に「いやな男、徳川家康」を書いて一石を投じた。

私は少年時代、まだ岡崎中学に在学中、四年か五年の頃だったと思うが、その頃、一年に春秋二回刊行されていた校友会雑誌に、「徳川家康公論」を書いたことがある。四五年前、その雑誌を何処からか探しだしてきてくれた人があったので、

何気なしに読んでみると、文章は、もちろん中学生らしい舌足らずの生硬な文字によってうずまわっているにもかかわらず、論旨だけは現在の私の考えていることとまったく同じである。

中学時代の「徳川家康公論」は後述するとして、「いやな男・徳川家康」は、「子供心にも不愉快な印象」、「老獪陰険なる狸親爺」、「子孫に残す処世技術」、「家康的人間の流れ」の見出しで、家康の「冷酷な人生観と処世術」が述べられる。

近頃、徳川家康流の処世法が政治家、実業家を問わず、各会社銀行の重役や社員たちの生活観を風靡しているということを聞いた。信長や秀吉のいない世界では、いかにも今日の時代にふさわしい現象であるかも知れぬ。(略)、只管、自分の地位を築きあげること汲々としている小徳川家康がいたるところに、うようよしていると聞いて、私は唯、茫然自失するのみである。

と、結んでいる。

尾崎士郎が「いやな男・徳川家康」の冒頭で述べている〈岡崎中学に在学中〉に校友会雑誌に「徳川家康公論」を書いた、というのは、正確に言えば大正四年四月発行の学友会誌の「両公記念号」に

書いた論文のことである。

大正四年は徳川家康の没後三百年に当り、徳川四天王の一人として功績のあった本多忠勝と合せて、「家康、忠勝両公三百年祭」が岡崎で三日間にわたって行われた。『九十年史』によれば、この三百年祭に協賛して、愛知二中の学友会が発行したのが、「両公記念号」である。

手許のある同誌を見るとA5判で、二百頁を越える大冊だ。巻頭には家康と忠勝の画像(写真版)が載り、家康の遺墨をはじめ、関係する写真などが満載されている。寄稿は校長の他教職員が八人、生徒八十二人。生徒は一年から五年までの全学年に及んでいる。生徒の文章には、「予の畏敬する家康公」や「本多忠勝公の勇武」といった礼賛文が多いのは、同誌の発行の目的からいって当然だ。しかし「第四学年 尾崎士郎」の一文は、異彩を放っている。題名こそ「徳川家康公論」だが、内容は必ずしも家康に「畏敬」を抱いたり、単純に礼賛したものではない。書き出しも興味深い。

去年の夏の事なりき、永き日の徒然なる儘に、我れ一日、郷村を距る約二里、海水浴場を以て聞えたる宮崎と言ふに遊びぬ。

碧波浩蕩、洋々たる大海は渺茫として霞み渡り、其前面に浮びたる緑滴の如き鳥影を眺めたる時、我が胸間を掩ひし妄念は恰も快刀乱麻を断つが如くに、払去られ、神氣自ら清澄なるを覚えて、暫く自然の威力の大なるに感ぜずんばあらざりき。(略)

吾れは愴然として瞑想に耽りき。而して思ひぬ。英雄の一生も亦彼の没せんとする太陽の如きものなるかな。

と英雄論を述べたうえで、〈今絶世の英雄、時代の建設者、徳川家康の半面〉を次のように断じている。

徳川家康の一生は眞に完全無欠なる英雄の一生なりき。彼の生涯を探りて、革命的、反逆的の行為は毫も見出す能はず。然り。彼は熱血的英雄にあらざりき。彼は詩的英雄にはあらざりき。然りと雖も其堅実なる思想、遠大なる抱負、巧妙を極めたる政治は、亦以て彼の英雄的才幹を證するものたらずんうあらず。彼の一生が熱血的に非りしが故に彼は往々世の青年子弟の好まざる所となれり。彼が詩的英雄たらざりしが故に、世人は屢々彼の偉大を語る事を忘れたりき。然れども、苟も人物を論評せんと欲する者は先づ其、感情的態度を去らざる可らず。余輩、年少常に功名に憧憬する者、私情を以て論ずれば家康は、最も好まざる英雄なり。何となれば、其波瀾少き事に於て、其末路の悲惨ならざる事に於て、同情す可く欣慕す可き點の甚少少なればなり

尾崎がここで強調しているのは、徳川家康を「偉大なる人物」と認めながら、「好まざる人物」だと言っていることだ。「其波瀾少き

尾崎士郎の落第（都築久義）

事」と「末路の悲惨ならざる事」を理由にあげているのが特徴で、彼の家康論の根幹だろう。もっとも、末路が悲惨であれば、誰でも好んだ人物だったとかいえば必ずしもそうではない。

安田武の「戦争文学の周辺（二）尾崎士郎論」（『定本戦争文学論』第三文明社 昭52・8 所収）に教えられたのだが、尾崎士郎は「反古」という短文を『講座 現代芸術』Ⅲ（頸草書房 昭33）の月報（未見）に書き、その中で、大正十五年六月号『不同調』（未見）の「古今の尊敬と憎悪する人物」というアンケートで、「歴史上の人物は何らの意味で大抵好き」と注記しながら、「憎悪」する人物として、「強いて求むれば、明治維新の頃、出没した気取りやの志士、源義経、弓削道鏡、徳川家康」を挙げている。ただし、明治維新の頃の志士は、後に小説の題材にしているので「憎悪」していたかどうかはわからないが。

ちなみにこのアンケートの中で好きな人物として、石川五右衛門や明智光秀、西郷隆盛をあげているのは、まさに「末路の悲惨」だったゆえであろう。

尾崎士郎は昭和十年代から歴史小説を執筆するようになるが、最初に取りあげたのが徳川家康に敗れた石田三成であったことは、中学時代の家康嫌いの強さの表れであろう。

小説「石田三成」が、『都新聞』に連載されたのは、昭和十三年四月からだ、折からの「支那事変」で尾崎士郎は従軍（ペン部隊「昭13・9」）したため九月で中断を余儀なくされ、秀吉の後継問題が

中心で石田三成に多くは筆が及んでいない。

しかし、これが昭和十三年十二月に中央公論社から刊行されると、その「序」で次のように書いている。

私が彼の性格に傾倒する所以のものは自分に備わる一切の能力をおのれの信じたる必然のために投擲してかへりみなかつたところにある。捨身と言へば捨身であるが、しかし弱輩にして天下に号令する彼の気魄は宿命に徹することによつて一層輝きを加へたと言へやう。動乱の時代にあつて、ひとすぢの叡智の光をたよりに動蕩する運命の大きくもりあげていつた彼の逞しさは東西古今を通じて匹敵することを求むることさへ困難である。

かなわぬ敵と知りつつも、捨身で挑戦し、味方の裏切りで大敗し、自害もできずに斬首されたという三成の末路の悲惨こそ、尾崎の好きな英雄であつたはずだ。関ヶ原の敗軍の将、石田三成を最初の歴史小説で取りあげた尾崎士郎は、その後の歴史小説で関ヶ原合戦を数多く扱っているが、いずれも敗者である西軍の武将に焦点をあてている。

歴史小説で最初に取りあげたのは敗軍の将石田三成であつたが、尾崎が政治から文学に点する契機となつた時事新報の懸賞短篇に入賞した「獄中より」は大逆事件に材を得た小説であり、大逆事件の

中心人物であつた幸徳秋水を、その思想や思想弾圧という視点からではなく、「敗軍の将」として描き続けたことも、多くの大逆事件関連の小説の中で異彩を放っている。

拙著『実説人生劇場』（前出）に序文を寄せていただいた尾崎一雄氏はその中で、尾崎士郎の文学の特徴を次のように書いておられる。

尾崎士郎は成功者、あるひは時を得顔の者に背を向ける。彼の心情をゆすぶるのは、志を堅持しながら蹉跌した悲運者の姿である。青成瓢吉、石田三成、立花宗成と名を挙げるまでもなく、尾崎士郎作品の主人公はすべて悲運者、敗残者である。人間として、同時に作家として、尾崎士郎に冠して最も適したパセイク——これである。

とすれば尾崎士郎文学の原点はまさに、この「徳川家康公論」にある。しばしば文学者の原点は処女作にあるといわれるが、尾崎士郎の処女作は、その意味では「徳川家康公論」であるといつてもよいかも知れない。